

『古今夷曲集』『後撰夷曲集』の漢字と振り仮名

―俳諧集との比較を通して―

田 中 巳 榮 子

はじめに

細川英雄（一九八九）は、「振り仮名―近代を中心に―」で、近代の振り仮名の時代区分を「①江戸時代以前 ②江戸時代 ③明治・大正・昭和前期 ④昭和後期」にできるとし、①と②を区分した理由について、次の様に述べている。⁽¹⁾

一つには、出版によって不特定多数の読者を想定した文章が書かれるようになったことがあげられようし、もう一つには、そうした読者の量と質を著者側・出版側で考慮しなければならぬ事情の生じたことを指摘することができ
る。
（『漢字講座4 漢字と仮名』二〇二頁）

また、『井原西鶴集(1)』の解説には、⁽²⁾
寛永期（一六三〇年頃）に入ると、連続体の草仮名を使用

する日本文印刷に適当な製版印刷（木版）に移行するとともに、京都を中心に民間の営利的な本屋（出版・販売）が登場した。
（『日本古典文学全集』一三三頁）

とあり、江戸時代に入ると、位相の異なる様々な読者層を想定し、営利を目的とする出版が盛んになる。それに伴って、表記の面に於いても、商業的出版がまだ活動しない江戸時代以前とは一線を画することになり、振り仮名を付す多くの版本が見られるようになった。

そこで、これまでに、拙稿（二〇〇八―二〇一六年）では、一六四八年刊から一六八一年刊までの振り仮名が散見する近世初期の一〇俳諧集を取り上げ、漢字と振り仮名の関係、漢字の数量的側面などの観点から検討を重ねてきた。⁽³⁾ その調査結果では、振り仮名には様々な機能があり、中には今野真二や矢田勉

に言及があるように、振り仮名の機能には、単にヨミを指示するだけでなく、表現の多層化に生かす機能があること、また、創意工夫が見える漢字を用いることなどが認められた。

今回、さらに幅広い情報を得るために、生白庵行風編の『古今夷曲集』（二六六六年刊）と『後撰夷曲集』（二六七二年刊）の狂歌集を取り上げ、振り仮名に関する分析を中心に、俳諧との比較を通して検討を加えることにする。その問題の一つに、『古今夷曲集』『後撰夷曲集』『吾吟我集』『貞徳百首狂歌』『半井ト養狂歌』などの狂歌集での振り仮名は、すべて平仮名（異体仮名を含む）で記されるが、同時代であるのものにも関わらず、拙稿の一〇俳諧集の振り仮名は片仮名表記という字種の相違があり、この点についても少し考えてみたい。

テキストには『近世文学資料類従』（狂歌編1:3 一九七七年 勉誠社）所収の『古今夷曲集』『後撰夷曲集』を使用し、翻刻には『狂歌大観』（明治書院）、『古今夷曲集』の歌の解釈には、『七十一番職人歌合 新撰狂歌集 古今夷曲集』（新日本古典文学大系）を参考文献とした。また、漢字に関しては『節用集』（伊京集・明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・黒本本・易林本・合類・書言字考）と『節用集大系』（一一一一巻・六〇巻）『中世古辞書四種研究並びに総合索引』『文明本節用集』

『倭玉篇』（慶長十五年版）などの古辞書を用い、適宜『大廣益會玉篇』『字彙』（和刻本辞書字典集成第二巻・第四巻）『漢語大詞典』『大漢和辞典』などを使用した。

なお、本稿では、狂歌・俳諧などの短詩形を「律文」と呼ぶことにし、拙稿の俳諧集は『紅梅千句』『正章千句』『宗因七百韻』『江戸八百韻』『當流籠技』『西鶴五百韻』『江戸蛇之鮓』『江戸宮筥』『軒端の独活』『七百五十韻』の一〇俳諧集をいう。

一 資料の概観

『古今夷曲集』の編者行風の序文は、

四角柱やかとらしや角のないこそそひよけれむかし／＼いふにいへぬ物の中より丸きもの、一つおいて二つになり三つになりし時より夷曲歌は始れりけり今狂歌といふなるべし

から始まり、「近代ちかよよりそ百首二百首数百首に及びてはよみけるそれが中其外こ、らの人のよめるにもあまたの病を除かず上下かしもかけあはざるおほかり」「又昔し今に落書といふには勝れたる作もあれとかれは世を諷し人を誇りあるまじき物なれば是に載る事なし」と狂歌の病を除く規範意識から、規準を与えるためと編集の経緯が記される。本書は、上代から近世初期

までの時間的・階層的に広範多岐に亘る書物から採択された一〇六一首の狂歌を収め、寛文六年（一六六六）に安田十兵衛により開板された狂歌集である。⁵⁾ 卷末には行風の和歌が添えられ、その序には「承応乙未元日」とあるので、承応四年には編集を終えていたことになる。この年（一六五五年）は、近世初期俳諧の調査資料の一つとした貞門俳諧の『紅梅千句』が刊行された年でもある。

一方『後撰夷曲集』は、編者は前者と同じ生白堂行風である。奥書には「寛文十二^壬歳首吉旦 寺町二条下町 西田勝兵衛板行之」と記され、『日本古典文学大辞典』には「同じ編者の寛文六年刊の『古今夷曲集』の体裁にはほならない」、作者の住所は「畿内が主で、他に陸奥から土佐・肥後にまでわたり、出所古書六十五部と前集よりすべて拡大している」とある。本書の所収歌数は「夷歌式目録」にある狂歌を除くと一六九四首が収められ、卷末の古書目録には前者と同様に広汎にわたる出典書の記述がみえる。

両狂歌集について、菅竹浦は、「仔細に見れば全く玉石混淆の姿であり、年代不同にただ雑然と類歌が挙げられて居るといふだけ」（『近世狂歌史』一三五頁）と上覧に供えているのにも関わらず、内容においては価値が乏しいと指摘される。⁶⁾

浜田義一郎の「狂歌・川柳」では、「古典の卑俗化は狂歌の基本的な姿勢」といい、「松永貞徳は、早くから狂歌を作っているが、狂歌には消極的であつたらしい」とある。また、

…（略）…貞徳自身の熱意の如何に拘らず、上層階級の流
行に追随して狂歌を作る者は民間唯一の指導者たる貞徳の
批点を得ようとしたらしい。殊に貞門の俳諧は狂歌のおかし
しみと共通するものがあり、また俳諧と狂歌が別種の文芸
として確然と分れない時代であるから、門下俳人の大部分
は狂歌も作り、それらは生白堂行風の『古今夷曲集』（寛
文六年）『後撰夷曲集』（同十二年）『銀葉夷歌集』（延宝六
年）に入っている。⁷⁾

（岩波講座 日本文学史 第九卷）六頁）
と記し、貞徳は俳諧と同様に、狂歌においても実作と指導の両面において活躍していたことが窺える。形式面では、和歌の一体である狂歌と、連句形式の俳諧とは違いがあるが、掛詞・縁語の技巧を駆使し、当意即妙のことはを用い、遊戯的な性格を有する点では共通性がある。考察を進めるにあたって、室町期以前の作者による狂歌も所収されることには問題があるが、表記形態や振り仮名に関しては、編者行風によるものとみなすことができるので、時代的には問題がない。

では、実際に狂歌を俳諧と対比したときに、表記面において違いはないのだろうか。以下漢字の数量的側面や振り仮名の機能など、表記の特徴に検討を加えていきたい。

二 漢字の数量的側面に関する考察

次の【表一】には、『古今夷曲集』『後撰夷曲集』の漢字の使用数、振り仮名の付記率などを調査した結果を提示した。

但し、【表一】の一首当たりの漢字数では、『後撰夷曲集』には二首（一〇八三・一〇八四番）の長歌があり、これを除くと一六九二首中漢字数は一三三四字で、一首当たりの漢字数は約六・七となる。また、この表には、『古今夷曲集』の歌本文に付す振り仮名で、解題に後の書き入れと記される次の延一九語の振り仮名は含まない。（漢字の下の数字は歌番号を示す。）

大苦^く（二四七）・帷子^{かたびら}（一五〇・一五一）・羽^{はね}（二五三）・
仏^{ぶつ}（二六二）・蘭^{らんぼくま}（一八四）・羽がき^{はねがき}（一九一）・欲^ほ（二二二）・
鞆^{たもと}（二七五）・歌^{うた}（五四四）・頃^{ころ}（五四八）・箬^{はたけ}（五五四）・
楽^ら（六一六）・壁^{かべ}（六一八）・氣^け（六二二）・世間^{よのなか}（六一五）・
世間^{よのなか}（左訓：七二七・八七七）・世間^{よのなか}（八二六）

【表一】を一覧すると、狂歌集両者の一首当たりの漢字数では、ほぼ同じであるが、振り仮名付記率には大差がある。異なり漢字数では、佐竹秀雄（二〇〇五）が現在の日常生活では、「約二〇〇〇字程度の漢字を知っておけば間に合う」と述べ、また、常用漢字が一九四五字であることを考えると、決して少ない数字ではない。

因みに『古今夷曲集』と『後撰夷曲集』の仮名使用数・漢字使用数と、一〇俳諧集中最も一句当りの漢字数が少ない『正章千句』、並びに最も一句当りの漢字数が多く、漢詩文調の特徴が見える『軒端の独活』を例にとって比較してみると、【表二】のようになり、狂歌集の総字数に対する漢字使用率は俳諧集よりも低く、仮名使用率が高い。この事象の一つには、俳諧にとって重要な俳言の中に漢語が含まれることが、漢字の使用数に反映しているのではないかと推察される。

【表一】『古今夷曲集』と『後撰夷曲集』の漢字数・振り仮名付記率

総歌数	古今夷曲集	後撰夷曲集
延漢字数	一〇六一	一六九四
異なり漢字数	七三六五	一一五〇八
一首当りの漢字数	一二七四	一三四七
振り仮名付漢字延数	約六・九	約六・八
振り仮名付漢字延数	六四五	二五一
振り仮名付記率	約八・八%	約二・二%

(序文・題詞・詞書を除く)

【表二】狂歌集と俳諧集の漢字と仮名の使用字数

作品	総字数	漢字延数(割合約%)	仮名延数(割合約%)
狂歌			
古今夷曲集	二六九二〇	七三六五(二七・四)	一九五五五(七二・六)
後撰夷曲集	四二七五〇	一一五〇八(二六・九)	三二二四二(七三・一)
正章十句	一三三六五	四二五八(三二・一)	九〇〇七(六七・九)
俳諧			
軒端の独活	七〇八〇	三八〇六(五三・八)	三二七四(四六・二)

(序文・題詞・詞書を除く)

さらに、今野真二(二〇〇九)の「大山祇神社連歌」と比較してみると、連歌は原則として、漢語を使用することなく、堂

上から地下へと広まった文芸である。故に「大山祇神社連歌」の漢字使用率一九・五パーセントは、俳諧や狂歌に比べると低い数字が示されている。

参考までに、資料とする狂歌集両者の出典書中、当代の個人の狂歌集から多数入首される『吾吟我集』(石田未得)、そして、『貞徳百首狂歌』(松永貞徳)の歌本文の一番から百番までの漢字数と振り仮名数を、『古今夷曲集』『後撰夷曲集』と比較してみたのが【表三】である。

【表三】狂歌集四種の一から百番までの漢字数と振り仮名数

狂歌集	漢字数	振り仮名付き	振り仮名付記率
古今夷曲集	六九一	六三	約九・一%
後撰夷曲集	七〇〇	一七	約二・四%
吾吟我集	五一一	七	約一・四%
貞徳百首狂歌	六七〇	四三四	約六四・八%

この表では、漢字数に大差はないが、『貞徳百首狂歌』の振り仮名付記率が突出しているのが見て取れ、これは、わずか百首を収める狂歌集ではあるが、啓蒙書とする目的があったためと捉えることができる。『貞徳百首狂歌』一〇〇首中に見える

振り仮名付き漢字四三四字は、『古今夷曲集』一〇六一首中の総振り仮名付き数六四五字の約六七パーセントを占め、『後撰夷曲集』では、一六九四首中二五一字で、『貞徳百首狂歌』の四三四字にも満たない。この現象の要因には、行風が出典書から採録する際に、次の①のように『後撰夷曲集』では振り仮名を削除すること、②では振り仮名の削除と共に振り仮名を付す語を仮名書きに改変していることがある。(以下傍線は稿者付記)

① 『後撰夷曲集』 夏の夜は時鳥にそくらはる、

→ 蚊帳へもいらて待とせし間に(二四六)

『貞徳百首狂歌』 夏の夜は時鳥にぞくらはる、

蚊帳へもいらて待とせしまに(二四四)

② 『後撰夷曲集』 我恋は青み上戸のみさかり

→ 色にも出しとりもみたさし(七六三)

『貞徳百首狂歌』 我恋はあをみ上戸のみ盛

色にも出し取も乱さし(七二二)

右の例以外に、他の出典書でも、振り仮名・字種・漢字と仮名・用語などを忠実に模写することなく、行風個人の意図するものへと書換えが行われている。

因みに、書換え例をいくつか挙げておくと、次の③④は、出典書の仮名から漢字への書換え例であり、⑤⑥は『吾吟我集』の漢字を『古今夷曲集』では仮名に書換えが行われる例である。

○仮名から漢字へ

③ 『古今夷曲集』 卯花はどこからふれる白雪と

→ 空に不審の雲や立らん(二〇五)

『貞徳百首狂歌』 うの花はどこからふれる白雪と

空にふしんを雲や立らむ(二二二)

④ 『後撰夷曲集』 今よりは雨やはちかん柿紅葉

→ しふ紙色にふかく染つ、(四六九)

『吾吟我集』 いまよりの雨をやはちく柿もみち

しふ紙いろにふかく染つ、(二二六)

○漢字から仮名へ

⑤ 『古今夷曲集』 精舎には諸行無常となるかねの

→ しやぎりしきりにかはる祇園会(二五四)

『吾吟我集』 精舎には諸行無常となる鐘の

しやぎりしきりにかはる祇園会(二四四)

⑥ 『古今夷曲集』 ねふりつるかゝりたき捨なみくらく

→ 皆出すぎたりかゝるつり舟(五五九)

『吾吟我集』 ねふりつる篝たきすて浪くらく

皆出過たりかゝる釣舟つりふね（六五二）

⑤の「かね」は精舎の「鐘」としゃぎりの「鉦」の掛詞とするための仮名表記である。⑥の『吾吟我集』では、漢字全てに振り仮名を付し、『古今夷曲集』では漢字を仮名に改変するのは、両者がそれぞれに回文であることを明示する表記法を採用した結果である。

さらに、用語・仮名遣い・漢字の異表記などによる異同があり、語頭の「お」「を」の仮名遣いの違いでは、

「おつる」〔『貞徳百首狂歌』四〇〕↓「をづる」〔『古今夷曲集』一八二〕、「おどり」〔『貞徳百首狂歌』九六〕↓「をとり」〔『後撰夷曲集』一三六四〕、「うみおろして」〔『吾吟我集』五八九〕↓「うみをろして」〔『後撰夷曲集』一七四〕、「かきくけこおこそとの」〔『卜養狂歌』五八〕↓「かきくけこそとの」〔『後撰夷曲集』一〇三九〕

など、行風に「お」「を」に改める傾向が窺われる。

三 振り仮名に関する考察

江戸時代初期において、連綿体で書記される行草書体の印刷が可能になったことにより、慶長年間（一五九六—一六一四年）に刊行された『節用集』（慶長板行書本節用集）や、それ以降に刊行された『二鉢節用集』（一六二九年・一六三三年・一六三五年）、一六三八年から一六六五年刊の『真草二行節用集』には平仮名の傍訓が記され、今回資料とする狂歌集二種、及び『貞徳百首狂歌』（一六三六年刊）、未得の『吾吟我集』（一六四九年刊推定）、『半井卜養狂歌』（一六六九年刊）などの振り仮名も平仮名であり、平仮名振り仮名の隆盛期の始まりを見ることが出来る。とはいっても、製版（木活字）印刷が可能になる前の写本の中には、平仮名の振り仮名が全くないわけではない。矢田勉（二〇〇五）に、総ルビ的に平仮名で振り仮名を付す鎌倉初期写の『仮名書き法華経』（妙一記念館本）が紹介されている例もある¹⁰。拙稿の俳諧の振り仮名の考察では、一〇俳諧集において刊行時期・版下・書肆に相違があっても、すべて振り仮名は片仮名で統一され、『西鶴五百韻』（一六七九年刊）と西鶴の浮世草子『好色一代男』（一六八二年刊）では、版下は両者ともに水田西吟であるが、前者の振り仮名は片仮名、後者は

平仮名で書記される⁽¹³⁾。この違いは、俳諧集では書肆が出版する際に振り仮名を付す人の存在があったと想定でき、西鶴の俳諧と浮世草子の振り仮名の字種の違いは、振り仮名を付す人が異なる事と、後者では、仮名漢字交じりの作品に相応しい形で振り仮名を付したといえる。片仮名の振り仮名は、狂歌集中にも『古今夷曲集』の「世間」^{ヨナカ}（六一五）「栗」^{うら}（六一六）「歌」^{ウタ}（五四四）「壁ひ」^{カベヒ}（六一八）「気」^ケ（六二二）、『後撰夷曲集』の「弱畔鏝斛」^{シヤクハンクゴク}（一五五〇）と見えるが、これらは清書の段階ではなく、『古今夷曲集』では後の書き入れとあり、『後撰夷曲集』では一六四二番に「弱畔鏝斛」と平仮名で付し、一五五〇番の同語における片仮名の振り仮名は、注記はないが後人により付されたものだろう。

では、振り仮名は何故付されるのか。次に、その機能について考えていくことにしたい。以下機能別に少数の例を挙げておくことにする。

(一) 出現頻度が低い

序文・詞書などを除く本文中で、一回のみ出現する語に振り仮名を付す例には振り仮名を付す異なり語数中、『古今夷曲集』では三八一語中に三〇九語（約八一・パーセント）があり、『後撰夷曲集』では、一四八語中一〇二語（約六八・九パーセン

ト）がある。これを拙稿の一〇俳諧集の中で『紅梅千句』（拙稿二〇〇八）の句のみを例にとつてみると、振り仮名を付す異なり六一八語中、出現回数一回で振り仮名を付す語に五二〇語があり、約八四パーセントを占め、出現頻度が低い語に振り仮名を付す傾向が共通して現れている。次に『後撰夷曲集』を例に歌句本文のみであるが、一回限りの出現で振り仮名を付す語を、振り仮名部分の音読み・訓読み・音訓混淆読み別に提示してみた⁽¹⁴⁾。但し、一〇二語中不都合な二語を除く一〇〇語とする。

(1) 音読み

阿蔽	阿羅漢	意趣	曳醜	蕪婆訶	鷹緋	欲榮	疑心
騎馬	興	許由	公卿	苦患	花蔽	下焦	阮籍
紅闌	膏梁	碁盤	雜乱	三塗	四聖	湿氣	蛇思
種子	種	精	莊嚴	諸侯	序正	流通	腎精
利利	前載	草履	轉	塔	等	覓	貪贖
暖簾	八相	成道	卑下	慢	瓢箪	貧苦	風市
冥加	龍門	瑠璃	瑠璃	緑青			

五七語

右の音読み語では、日常的に常用されない、仏教に関する語や固有名詞が約四〇パーセントを占める。

「雑乱」は「雑乱々々」とあり、川音を表現する擬音語に当てられているが、漢字と振り仮名の関係では、漢字音の一部分

を用いた振り仮名として音読みとした。

(2) 訓読み（熟字訓・当て字を含む）

灰汁	生物	猪	石倉	兎兵法	海頭	雀賊	小篠	隱期
剃刀砥	樞	強き	煤	裾野	氣條	狸	翅	壺
生鰯	鉛	拳	蒜	零餘子	脛	饑	髭黒	額
臍	銚	実生	満干	木免	土産	蛇	止事	瘦田

四〇語

(3) 音訓混淆読み

續飯 常柚 日損

三語

(二) 多訓の漢字

生（生たる・生ふる・生て）・実（げ・まこと・み）・直（すぐ・すなほ・ね）・角（かく・かど・へつの）・御（み・ぎよ・ご）

『古今夷曲集』の序文の冒頭には、「四角柱やかとらしや角のないこそそひよけれ」と見え、「角」に「かど」と振り仮名を付す。

九九四番では九九三番の「角あれば物のか、りてむつかしや心よこ、ろまろく」とせよ」と心の柔軟さを説く歌に対して、

⑦をのづから角ひとつあれ人心

あまり丸きほころびやすきに（『古今夷曲集』九九四）

と「角が多少は必要である」と返し、「角」と振り仮名を付す。歌の内容から「かど」と読むことは想定でき、振り仮名「がと」

は誤記と捉える。振り仮名を付さない「角」の中で、「なごて角」（二四四・八〇六）「といひ角いひ」（三八四）「にも角にも」（七一八）「とても角ても」（八四二）の五語は「かく」と読み、半の角もし」（六三八・六三九）では「つの」と読むのは明らかであり、多訓の漢字に属する語である。

(三) 当て字

佐竹秀雄（二〇〇五）は「当て字というのは、その漢字の意味とは無関係に字の音や訓だけを利用して表記するもの」、熟字訓は「漢字二字以上が表す意味を利用して、和語や外来語を書き表すもの」といい、当て字と熟字訓の混合型の例として「波止場・寄席・型録・倶楽部」などを挙げ、「これらは音や訓を利用してはいるだけでなく、意味をも生かそうとしたものである」（前掲「注8」（二八頁）とする。

木村義之（二〇〇五）は当て字について、

日本語と漢字との長いつきあいの中、使用者層のすそ野が広がることにともなって、漢字本来の意味や音の知識が忘れ去られたり、誤解、ずれなどが生じたりもしたはずである。…（略）…あて字は日本語表記の複雑さを語るのに象

徴的な存在である。そこにあて字のおもしろさも難解さもあり、あて字とは何か、という定義と分類もやっかいなも

のとなつてゐる。(『朝倉漢字講座』一八〇頁)

と述べ、「当て字」と「熟字訓」にはその判別を難い一面がある。

次の「ノ麻」は、『合類節用集』(④77・15)には「絲瓜 布瓜」と収録があり、『古今夷曲集』では、「ノ」を当てる。これは「へちま」の形を連想させる遊戯的な用字法であり、振り仮名には当て字のヨミを助ける効用がある。

⑧ にもいらぬ身なりながらに今日の世を

ノ麻ノちまの皮かわの團だん袋ぶくろ哉や(『古今夷曲集』八二五)

⑨ 心にはノ麻皮ノちまかわをたやすなよ

浮世うきよのあかをおとさんが為ため(『古今夷曲集』九〇九)

因みに、「ノ麻の皮」は「何の役にも立たないもの」をいう慣用語であり、ここでは、世の中を超越した心を持つことを説く。

(四) 熟字訓

(青) 海苔 <small>あをのり</small>	剃刀 <small>かみそり</small>	手纏 <small>たすき</small>	難面 <small>つれな</small>	(堅) 紅粉 <small>かたべに</small>	土器 <small>かはけ</small>	氣條 <small>すはえ</small>
餞別 <small>はなむけ</small>	和布 <small>あはぢ</small>	夫婦 <small>めおと</small>	夫妻 <small>めおと</small>	(以上) 『古今夷曲集』		
灰汁 <small>あいく</small>	氣條 <small>すはえ</small>	足緒 <small>あしお</small>	零餘子 <small>めがこ</small>	雀賊 <small>えつざい</small>	木尻 <small>きつく</small>	(以上) 『後撰夷曲集』

これらは、漢字一字とヨミが対応しない熟字訓であり、漢字が言語の概念を表し、振り仮名が和語を表す役割を果たしてい

る。以上の常用化した熟字が多い中で、俳諧集にはあらわれなかつたヨミの難しい「零餘子」(九一三)「雀賊」(二〇九〇)は、『倭名類聚抄』(二〇巻本)に収録があり、「零餘子」は山芋(巻一七・二五)「雀賊」は小鷹(巻一八・四)のことをいい、「難面」(「夫婦」)「夫妻」を除く語は、それぞれの狂歌集で一回限りの出現に属する語でもある。

(五) 漢字と振り仮名で重層した意味を持たせる表現としての振り仮名

室町末期頃から見え始めた、重層した意味を持たせる表現としての振り仮名について、矢田勉(二〇〇五)は、振り仮名の機能上の分類として、「A音形表示機能 B二重イメージ喚起機能」があるとし、「Bは、Aから派生した後発の機能であるが、当該漢字と振り仮名によって与えられた語形とを合致させることが目的ではなく、寧ろその間にある距離を表現の多層化に生かすものである」(前掲「注12」一六八頁)と述べる。

(一) から(四)では使用頻度の低い漢字にヨミを指定する用途や、慣用の音訓に属さない臨時的なヨミが与えられる特殊な振り仮名などが認められたが、(五)は、漢字の持つイメージと、振り仮名が持つイメージが結びついて、ことばの使用範囲が拡大され、特殊な表現効果を生み出す振り仮名である。

⑩春たつといふはかりにや大ぶくの

水氣みづけも霞かすみて今朝はみゆらん（『古今夷曲集』五）

⑪一番の風の手なみに霜氷

川しもさして雑ざつ乱らんくくくく（『後撰夷曲集』二）

⑩では「はるたつといふ許にや三吉野の山もかすみてけさは見ゆらん」（拾遺集一 壬生忠岑）を本歌取りとし、漢字表記と振り仮名で、立春とともに凍っていた水が溶け蒸気が立ち上る情景と、大ぶく茶の湯気との二重表現を喚起させる表記例である。

⑪の漢字「雑乱」では、「雑」は「まじる」、「乱」は「みだれる」意を持ち、それらの意義を意識して用いたと解し、春一番で水が溶け、砕けた氷が流れる音を表したものである。これは、共に趣向を凝らした表記法を採用し、⑩⑪の例では、漢字と振り仮名は切り離せない存在であり、両者を並列させることにより、二つの映像を描出する手法を採るものである。このような技巧的な手法は、乾善彦（二〇一三）が万葉集中訓字主体表記の中で仮名が使用される場合には「仮名であることによって、言語外の表現意図がそこにあらわされている」と述べることに、重層した意味を表す点においては掛詞と類似する表現法であり、少ない字数で一文を構成する律文にとって、効果

的であることはいうまでもない。

以上の振り仮名の機能以外に特殊な振り仮名として、一つにはヨミの一部分のみを記す振り仮名がある。その例を提示しておくとして、「寒」は『古今夷曲集』中四回出現し二首（一五六・二六三）に振り仮名が付され、二六三番では「寒もて寒かんをふせぐなるへし」とあるが、一五六番では

⑫寒かんよりも百倍あつき炎天は

身にきる物のわたくしでなし（『古今夷曲集』一五六）

と、振り仮名は音読みを指示する「ん」のみを付すように見える。しかし、他の振り仮名に比べて線が太く重ね書をしているのが窺え、刷りの不手際を補正するために、「ん」は上から墨でなぞったが、上の「か」はなぞらずにそのままにしたために、見えなくなったのではないか。

また「奪ばつ」では、『古今夷曲集』の序文に「己おのが迷ひに情を奪はれ」とあるが、次の⑬の振り仮名は「ばふ」と記される。『黒本本節用集』（18）『饅頭屋本節用集』（16）では「奪」に「パウ」の訓を付すのが見え、『万葉集』に見える母音の連続を回避する用法に倣ったものだろう。

⑬白波かほなみや海賊かみぞくどものる舟は

人のたからを奪^ばて取楫^{かぢ}（『古今夷曲集』六四七）

もう一つには、『古今夷曲集』に二回、『後撰夷曲集』に一回振り仮名を付す「煩惱」がみえる。しかし、その振り仮名は、『古今夷曲集』では「ほんのう」（九一九）「ほんなふ」（一〇〇七）とあり、『後撰夷曲集』（一三三三）では「ほんのふ」と仮名遣いに三種の相違がある。これら三種とも編者行風が振り仮名を付けたならば、行風一人にこれだけの仮名遣いがあるのか問題があり、仮名遣いを統一する意識を持ち得ていないということになる。『節用集』では「ボンナウ」「ほんなう」「ほんなふ」と訓を付し、『節用集大系』所収の『真草二行本節用集』（第七卷―第一〇卷・一六三八―一六六四年刊）の「ほんなふ・ほんなふ」と『古今夷曲集』一〇〇七番のみが一致する。因みに、振り仮名なしの「煩惱」は、『古今夷曲集』で四回、『後撰夷曲集』で一三回出現する。それらの字形と比較してみると『古今夷曲集』の一〇〇七番のみが他の「煩」の「頁」が極草書体であるのに対して「貝」の行書体であり、振り仮名の字形にも少し違和感がある。一〇〇七番は作者良想法親王の出典書の表記を見る必要があるとは考えているが、書き手行風のその時の気分などを考慮して、今後の課題としておくことにする。

さらに、振り仮名ではないが『後撰夷曲集』六四二番に「御

前」の「御」に濁点を付す例がある。漢字に濁点を付すのは俳諧集の調査でもあらわれ、複数のヨミの中で「ごぜん」と指定する働きを持ち、振り仮名に相当するものである。

終わりに

何故振り仮名が付されるのか。振り仮名は書き手と読み手のなかだちとなるのはいうまでもない。現在では主として漢字の読み方を指示するために振り仮名が用いられるが、近世の律文における振り仮名には、単にヨミを示すだけではなく、漢字が表す意味と振り仮名が表す意味の重層性やその場面のイメージを描出する働きを持つ振り仮名もあり、俳諧集での調査結果と考え合わせて、

次のような機能が認められる。

(一)漢字のヨミを助ける

- ・ 難読漢字
- ・ 出現頻度が低い
- ・ 当て字
- ・ 漢字一字と訓が対応しない熟字訓
- ・ 多訓を持つ漢字のヨミを特定する

(一)表現性を重視し、一語に重層した意味を持たせる

(二)は近世の特徴と捉えられ、当て字のように、意味とは無関係に、漢字の音・訓を利用するのではなく、漢字と振り仮名が個別の意味を持つ点では、熟字訓とも異なる振り仮名の機能である。

俳諧集の振り仮名と比較すると、機能上では相違がないが、振り仮名の字種には、同年代でありながら、俳諧の片仮名に対して、狂歌では平仮名を用いる相違がある。本稿で取り上げた狂歌集は、編者行風或は作者(未得・貞徳) 自書の作品集であり、振り仮名も編者或は作者が付記したと推察され、印刷技術の発達や平仮名で傍訓を記す節用集が出現したことが、平仮名で振り仮名を付すことに影響していると考えられる。と同時に、諧謔化した和歌という意識が働き、行草書体で書記する仮名漢字交じり文に準じる形で、振り仮名に異体仮名を含む仮名が選択されたのではないだろうか。

一方、一六四八年から一六八一年と刊行年に幅のある一〇俳諧集で、振り仮名が片仮名に統一されていたことは、一八二三年の『俳字節用集』(『節用集大系』六〇巻)も上述の『二鉢節用集』『真草二行節用集』とは異なり、片仮名傍訓であることから、俳諧では版下を書く段階で振り仮名を付す人の存在が

あり、片仮名で付すことが通例であったといえる。何故俳諧の振り仮名が片仮名なのかは、安田章が「節用集は和漢聯句のための用語辞典であると臆断する」「室町時代に成立の辞書は概ね韻事を目指したものであった」と述べることから、片仮名傍訓の室町期の『節用集』との関係を考慮に入れる必要があるだろう。

注

(1) 細川英雄「振り仮名、近代を中心に」『佐藤喜代治編』漢字講座4 漢字と仮名 一九八九年 明治書院 二〇二頁

(2) 『井原西鶴集(1)』(日本古典文学全集 一九八二年一三版 小学館一三頁)

(3) 田中巳槲子(拙稿二〇〇八―二〇一六年)(後)『近世初期俳諧の表記に関する研究』二〇一八年 和泉書院

(4) 今野真二『振仮名の歴史』二〇〇九年 集英社

室町時代までは「読みとしての振り仮名」とみることができるが、室町末期頃には「表現」とかわる振仮名が生まれつつあることがわかった(九六頁)

矢田勉「振り仮名」『漢字と日本語』朝倉漢字講座1

二〇〇五年 朝倉書店

当該漢字と振り仮名によって与えられた語形とを合致させることが目的ではなく、寧ろその間にある距離を表現の多層化に生かすものである」(一六八頁)

(5) 『古今夷曲集』の総歌数を一〇六〇首とする説もあるようだが、七三五番の前書きに「七条前大僧正宣如より折に餅みつから煎櫃いりむを入れて 折からにめてたい事もちあけりみつからきもをいりかやにして とよみて給ひける返りこと」とある。この「折からにきもをいりかやにして」を七三四番の一首としたので、総歌数を一〇六一首とした。

(6) 菅竹浦『近世狂歌史』一九四〇年 日新書院 一三五頁
(7) 浜田義一郎「狂歌・川柳」(『岩波講座 日本文学史 第九卷』一九五九年 六頁)

(8) 佐竹秀雄「現代日本語の文字と書記法」(『文字・書記 朝倉漢字講座2』二〇〇五年 朝倉書店 二五頁)

(9) 今野真二『大山祇神社連歌の国語学的研究』二〇〇九年 清文堂出版 三八一頁

(10) 『節用集大系』(第二卷・第四卷―第一一巻) 一九九三年 大空社

(11) 未得の『吾吟我集』の刊年は不詳であるが、自序に「慶安二年四月中旬に題なきに筆をくはえて」と記述があること

から慶安二(一六四九)年頃に版行が行われたと推定できる。

(12) 矢田勉「振り仮名」(『漢字と日本語』朝倉漢字講座1 二〇〇五年 朝倉書店 一七二頁)

(13) 『西鶴五百韻』一六七九年刊 深江屋太郎兵衛 版下(序文：中村西国／本文：水田西吟) (『近世文学資料類従』古俳諧編30 一九七六年 勉誠社) / 『好色一代男』一六八二年刊 荒砥屋孫兵衛可心板・西鶴作・版下(水田西吟) (『近世文学資料類従』西鶴編1 一九八一年 勉誠社)

(14) 一回限りの振り仮名を付す語数では、同じ漢字列を含む単純語と複合語、また略字など字体の異なる語は別字とした。

(15) 木村義之「あて字」(『漢字と日本語』朝倉漢字講座1 二〇〇五年 朝倉書店 八〇頁)

(16) 乾善彦「誰が主役か脇役か―日本語表記における漢字と仮名の機能分担―」に『万葉集』五二八番の「奈我来」が「汝が来」と「長く」の掛詞になっていることについて、「ここを表語的に書いたのでは、どちらかの意味が前面に出てしまい(略)、一方の意味が読み取りにくくなってしまふ」と記される。

(『日本語学』二〇一三年四月臨時増刊号 明治書院 一五九頁)

(17) 安田章『中世辞書論考』一九八三年 清文堂出版 五一
六頁

参考文献

板坂元「初期俳諧」(『岩波講座 日本文学史 第七卷』

一九六〇年 岩波書店

『黄表紙・川柳・狂歌』新編日本古典文学全集 一九九九年

小学館

『紅梅千句』近世文学資料類従古俳諧編39 一九七五年 勉誠

社

『吾吟我集』『貞徳百首狂歌』『半井卜養狂歌』近世文学資料類

従 狂歌編2・4・6 一九七七年 勉誠社

『拾遺和歌集』新日本古典文学大系 一九九五年 第四刷 岩

波書店

『初期俳諧集』新日本古典文学大系 一九九一年 岩波書店

林若樹『狂文狂歌集』(日本名著全集第十九卷 一九二九年

日本名著全集刊行会)

『連歌論集 俳論集』一九六一年 岩波書店

(たなか みえこ／本学東西学術研究所非常勤研究員)